

【最優秀賞】

「二十五km先の故郷」

羅臼町立知床未来中学校
3年 川端 歩佳

私が住む羅臼町の目の前には、北方四島のうちの一つ、国後島が見えます。太平洋戦争のあと、ソ連軍の侵攻にあい、島の住民が離れなければならなくなった島の一つです。しかし、このような悲しく、辛い出来事は今、認知度が低下し風化しているように感じます。もしも私が島の住民の一人だったら、と考えると、悲しさや悔しさ、どうしようもない気持ちで胸がいっぱいになります。

島を離れなければならなくなった島民の中には、羅臼町に移り住んだ人が居ます。国後島民だった私の曾祖母もその一人です。曾祖母は孫である私の母に、「おばあちゃんが国後島に居た頃は”早起きは三文の徳”と言われていて、朝早く起きて海に行くと魚や貝が沢山打ち上げられているから、それをよく拾ったもんだ」と曾祖母が暮らしていた占領される前の国後島のとても豊かな海の事をよく話していたそうです。

島がソ連軍により占領され、飛行機も連絡船もない中、島民は強制的に自分達の住んでいた島を出なければならなくなりました。中には着の身着のまま海に飛びこんだ人も居たそうです。大荒れの海を越え、曾祖母達がたどり着いたのが対岸の街。戦争直後でお金も、食料も、衣服もない状態で知らない街に着いた時、これからどう生きていけばいいのか…。島民の方々をどう助ければいいのか…。「助きたい」という気持ちと、苦しく、厳しい現実との間で迷い、お互いに悩んだのではないかと思います。

そんな中、曾祖母達は羅臼で酪農を営み生活し始めました。一緒に羅臼町に移り住んだ方々の中には語り部として活動をされている方も居ます。故郷である北方四島のよい所を、あの出来事を、後生へとつなげるために。

二十五km先の故郷は近いようで遠い。行ける距離なのに行けない。今はロシア人が住んでいる。悔しい。悲しい。私だったら大好きだった故郷そのものすら嫌いになってしまうと思います。ですが曾祖母はいつも国後島の良い所を沢山話していたと聞きました。辛い経験も忘れられないけれど、やっぱり国後島は素晴らしい所だった、と曾祖母はいつも話していたそうです。

このような歴史を、私は決して忘れてはならないと思います。しかし、北方領土問題は、全国的に認知度が低く、元島民の高齢化も進み、北方領土問題の当事者が年々減少しています。つまり、北方領土問題は一刻も早い解決が望まれます。それでも、全ての領土が日本に戻り、全て解決したとしても、きっと元島民の悲しい過去も全てなかった事にされてしまうと思うのです。領土が返される事が全てでしょうか？返還された事で元島民の心の傷や辛い過去はなかった事になるのでしょうか？今のこの状況では領土問題は解決することでなかった事にされ、この出来事を未来へつなげる人が居なくなってしまう。私はそれを見逃すことはできません。元島民の方々のために、日本の未来のためにも私は、私達は、結果だけでなく、出来事全てを後世へ語りつがなければならぬと思います。

何年経っても元島民の心の傷は消えません。今でも元島民の方々は二十五km先の自分が暮らした大好きな故郷が、いつでも帰る事ができる所になって欲しいと願っている、と私は思っています。

近くて遠い二十五km。私達はもう一度、改めて、領土問題と向き合い、領土問題について考えるべきだと思います。